

造形活動をともなった美術鑑賞 ー成羽町美術館でのワークショップー

関崎 哲

1. はじめに

ここ数年にわたり、幾つかの美術館で“造形的な表現活動を取り入れた美術鑑賞”というテーマでワークショップを実施している。これらの活動の詳細については、昨年、「造形活動をともなった美術鑑賞」として本学研究紀要にまとめたところである。本稿では、その後の、昨年11月に高梁市成羽町美術館で実施した活動について報告する。

今日、美術館で行われている教育普及活動は、作家・作品の解説や社会的な評価を一方的に伝えるというタイプから、鑑賞者が主体的に“見る・感じる”ことを促すタイプのものに変化してきている。「造形活動をともなった美術鑑賞」は、このような、鑑賞者が主体的に“見る・感じる”ことを促す鑑賞活動の内容を、さらに深めていくための一つの方法として提案し、実践しているものである。

もちろん、今回報告するワークショップも、その考え方を踏まえたものであるが、さらに新しい試みを盛り込んでいる点に注目していただきたい。

2. 実施したワークショップの概要

今回報告するワークショップは、2007年11月17日に成羽町美術館において、同美術館の依頼により企画実施したものである。美術館側からの依頼には、“2007年10月27日から12月2日まで行われる「熊谷守一展」にあわせ、その展示内容に関連するワークショップを”という条件が付けられていた。

熊谷守一は、明治から昭和にかけ作品を発表し、97歳の天寿を全うした画家である。写實的画風から出発し、表現主義的な画風を経た後に、対象を極限まで単純化して表現する“抽象的具象”といった画風を確立した。成羽町美術館での展示では、彼のそうした独特な様式による作品が展示の中心となっており、ワークショップでの鑑賞の対象もこの“抽象的具象”の画風で表された作品にしぼっていくことにした。

(1) ワークショップのねらい

熊谷の作品がなぜ人々の心を引きつけるのかといえ、彼の“抽象的具象”による表現手法が、描写の技術的な上手い下手を超越したところにあり、それゆえ「描く対象への思い」が鑑賞者に直に伝わっていくものであるか

らである。

このことを踏まえワークショップでは、熊谷の手法や表現の魅力を理解すること、また素朴な思いを絵に込めることのすばらしさを体験することを目的とした。

(2) ワークショップの実際

実際に行ったワークショップでは、あらかじめ参加者に、自分の好きな動物やペットの写真、図鑑などを持ち寄ってもらい、作品制作の際の素材とすることにした。作品の制作に際しては、参加者の作品を熊谷の描いた作品の質感に近づけるため、制作の材料として絵の具の盛り上げやタッチが生かせるアクリル絵の具を用いることにした。また、完成した作品は参加者全員で鑑賞した後、美術館で乾燥、仕上げニス塗り、郵送で各参加者に返却するという方法をとった。

実施したワークショップの流れは以下の表の通り。

活動	時間	場所	活動内容
導入①	14:00	ワークスペース	活動の説明と鑑賞のための導入
鑑賞①	14:15	展示室	作品鑑賞（生き物の絵を中心に）
導入②	14:30	ワークスペース	作品についてのディスカッションと作品制作のためのヒント提示
制作	14:40	ワークスペース → 展示室	展示室 制作・展示室の作品も必要に応じて見に行く
鑑賞②	16:00	ワークスペース	参加者が制作した作品の鑑賞
鑑賞③	後日	各自宅	郵送された作品を各自で鑑賞

当日の参加者は、16名。小学生から大学生、主婦、保育士、60代の方まで多岐にわたった。それぞれが、あらかじめ自分の描きたい生き物の資料を持ち寄ることにより、熊谷の作品の鑑賞の観点や、参加者自身の制作の動機が明確になり、スムーズな活動の展開ができたように思う。

実際の制作では、熊谷の“抽象的具象”による表現手法によって、参加者それぞれの描きたい生き物を表現することに重点を置いた。単純化された色と形、そして明確に描かれる（時には、塗り残す）輪郭線による表現方法は、子どもたちにとっては、描くことへの抵抗感を取り払う役割を果たしたようで、すぐさま制作に取りかかり、のびのびとした表現がみられた。一方、大人にとっては、逆にこのことが抵抗感となり、具体的にどう描い

ていったらよいのか戸惑う姿が見られた。このような状況は、何度か熊谷の作品を展示室に見に行ったり、子どもたちの描く様子を見たりすることで変化し、大人たちもそれぞれ自分なりの考えや気持ちを表そうとする表現へと展開していった。このことは、様々な世代が集まり表現活動を行うことが可能な美術館でのワークショップ特有の効果であると考えられる。

制作後の鑑賞では、それぞれが自分の描いた生き物に対する気持ちや、それを作品にどう込めたのかを述べ合いながら、熊谷の生き物に対する気持ちを考えてみた。参加者の発言それぞれに、熊谷の表現したかったことや、表現手法についての理解の深まりが感じられた。

3. 今回実施したワークショップにおける新しい試みとその評価

最初に触れたように、今回のワークショップでは、これまでにない新しい取り組みを試みている。それは、「活動の流れ」の表の中の最後の部分、“郵送された作品を各自で鑑賞”するというものである。

この取り組みは、今回の熊谷の作品の鑑賞に限ってのものとしてではなく、美術作品の鑑賞全体に関わるものとして考え、試みたものである。美術作品を見るということは、ある意味でその美術作品が鑑賞者に見られることにより、鑑賞者自身の心の中に想像力のスイッチを入れる作用を果たし、そのことで鑑賞者はこれまでにないものの見方や表現方法を獲得していく、と考えられないだろうか。鑑賞者によって見られた作品は、そのままの“かたち”で鑑賞者の心の中に定着されるのではなく、少しずつ鑑賞者自身の感じ方や経験など様々な条件で変貌していく。それは鑑賞者の、ある種の理想の方向であったり、そのときの心持ちに添わせる方向にと自由に形を変えてゆくものである。このような過程を経て、初めて美術作品は、鑑賞者それぞれに固有のリアリティーを持つものとして共感され、理解されていくものであると考える。こうした事実を感覚的に経験する手だてとして、この取り組みを考え、試みることにした。

今回のワークショップで制作された作品は、完成された後、郵送されて自分の手元に送られてくるまで、制作者自身の視界からいったん消える。この間に、制作したときの表現対象に関する思い入れが強ければ強いほど、作品の“かたち”は変貌し、作品の完成時と自分の手元に届いたときのイメージの“ずれ”を感じるはずである。

ワークショップ実施後、数人の参加者にこのことについて質問する機会を得た。その際の回答には、この取り組みのねらいとしたことが、ある程度伝わっているという感触が得られるものが多かった。ただし、それと同時に

に問題点もいくつか浮かび上がってきた。

問題点の1つ目は、送られてきた作品を見て少々がっかりしたという感想が出てきたことである。このことに関しては、作品制作の際の達成感を重視した鑑賞の方法をとるか、この取り組みでテーマとした「作品は単に表面的な“かたち”ではなく、そのイメージが、鑑賞者の心の中で変貌していくことで、リアリティーを持つものとなる」ということを別の方法で理解してもらう必要があるのではないかと考えている。

問題の2つ目は、子どもたちにとって、このような取り組みは意味を持つものであるかどうかということである。今回のワークショップでは、大人も参加していることから、この辺の取り組みのねらいを最後の鑑賞の際に話してみた。そのときの様子では、なかなか子どもたちにそのことに関して理解してもらうことは非常に難しいことであると感じた。子どもたちにしてみれば、出来上がった作品を、完成させた達成感とともに直ぐ持ち帰りたいという気持ちが強く、家庭での作品を目の前にした家族との鑑賞に重点を置くべきではないかとも考えた。ただ、今回のように様々な世代が参加するワークショップでは、あまり子どもたちに合わせ過ぎることをせず、難しいことは難しいと感じさせるのも1つの方法であるとの考えも捨てきれないでいる。

4. 終わりに

今回実施したワークショップは、“造形的な表現活動を取り入れた美術鑑賞”というテーマで行ってきた活動の延長上にあるものである。その意味では、この活動に新たなバリエーションを1つ加えることができたと考えている。ただ、今回このワークショップにおいて新しい取り組みを試みたことで、“造形活動をともなった美術鑑賞”の今後の課題も見えてきたような気がする。この活動によって生まれる、ワークショップ参加者の作品の鑑賞をどのようにするかという問題がそれである。

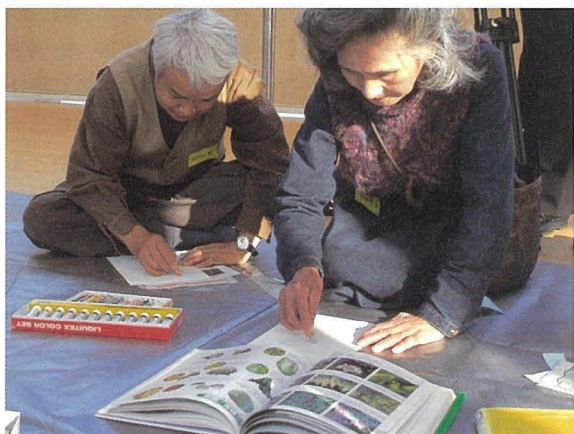
今後は、この問題について、美術館という環境面や参加者の年齢構成等を踏まえながら、より充実した鑑賞活動となるような方法を考えていきたいと思っている。



ワークスペースでの導入



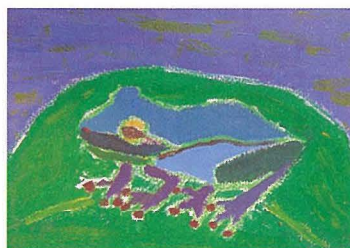
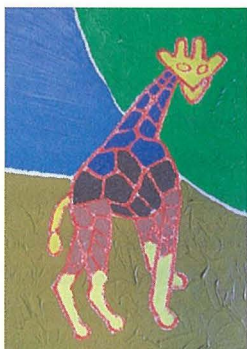
展示会場内での鑑賞と導入



参加者の制作の様子



参加者の制作の様子



ワークショップ参加者制作作品

*造形活動をともなった美術鑑賞 一成羽町美術館でのワークショップー 関崎 哲